水俣学通信

第 56 号
2019.5.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies

第３回環境被害に関する国際フォーラム　２月24日　水俣市公民館（写真：水俣学研究センター）

目　次

論説：
「環境省の求めに応じた日本神経学会の『メチル水銀中毒症に係る神経学的知見に関する意見照会に対する回答』を読んで」…… 2
下地明友

第３回環境被害に関する国際フォーラム報告：
「中国からの招聘者と共に参加して」…… 3
大塚健司

「水俣病と韓国の加湿器殺菌剤惨事」…… 4
チェ・イェヨン

報告：
「水俣病事件研究交流集会の魅力」…… 5
池田理知子

「タイ・ミャンマー科研（2016～18年）バンコク訪問の記録―金鉱山開発による公害・生活破壊と操業停止後の村の自立に向けた取り組み」…… 6
宮北隆志

「ミャンマーの金鉱山と水銀使用の風景」…… 7
花田昌宣

2019年度 科学研究費補助金採択結果・水俣学研究センター新刊紹介・水俣学研究センター日録 …… 8

熊本学園大学水俣学研究センター

《論 説》

環境省の求めに応じた日本神経学会の「メチル水銀中毒症に係る神経学的知見に関する意見照会に対する回答」を読んで

水俣学研究センター顧問　下 地 明 友

(1) 「日本神経学会」が絡む不思議な動き；過去少なくとも三度

第１は、1958年。英国の神経学者マッカルパインが水俣を訪れ、15人の水俣病患者を診て、英国のハンター＝ラッセルの報告した有機水銀中毒にきわめて類似しているという示唆を与え、『ランセット』誌に発表した。これが病因物質として有機水銀がうかびあがった最初である。この結果を、日本神経学会で発表しようとしたところ、熊大の某教授によって止められたという（原田正純著『水俣病』）。その後、水俣病の病理所見はハンター＝ラッセルの報告と一致することが武内忠男教授によって報告された。

第２は、1971年。アメリカの水銀問題研究者カーランド博士が住民の実態調査を提案し、最初、日本神経学会に申し入れをしたが、なぜか日本神経学会は断ったという（原田正純著『宝子たち　胎児性水俣病に学んだ50年』）。これが契機となって熊本県（当時、澤田一精知事）が調査をすることとなり、武内教授に依頼し第二次水俣病研究班を発足させた。

第３は、2018年５月のこと。それは「環境省大臣官房環境保健部 環境保健企画管理課特殊疾病対策室長」の名で、「日本神経学会 代表理事　高橋良輔 様」宛ての「メチル水銀中毒症に係る神経学的知見に関する意見照会（回答依頼）」に対するものであった。西日本新聞の報道では回答の中身は「国側の主張を追認する内容」となっている。長年現地で水俣病の研究と臨床に従事する学会員の高岡滋医師は「密室で議論しており異例」「医学的にも論争がある事柄を十分な根拠を示さず、一方的にまとめており非科学的だ」と指摘した。日本神経学会は少なくとも三度、不思議な対応をしてきた。

(2) 一方、「日本精神神経学会」の対応は、「日本神経学会」とまったく異なっている。この点を「環境省大臣官房環境保健部　環境保健企画管理課特殊疾病対策室長」は熟知したうえで公的に議論するべきである。なぜか？

この二つの学会の対応には、水俣病研究史において違いがみられる。日本精神神経学会は、幾度となく学会の「研究と人権問題委員会」として、見解を「公表」してきた（「対策室長」が希望すればその資料も手に入ります）。この見解は「公的」に透明化され、学会誌に掲載され誰でも議論に参加可能。しかし、日本神経学会は、議論のプロセスを経ず、「密室で議論」されていると当の学会員からも批判されている。

そもそも日本神経学会と日本精神神経学会に共通するものとは何か。それは「科学」に対する真摯な態度であり、つねに「科学」とは何かを問い続ける探索・発見論的な姿勢である。ことの本質把握のため環境省の特殊疾病対策室長は双方の学会が根拠とする見解や文献を幾度も読み込んで欲しい。「水俣病は終わっていない」という言葉が含意するものは深い。

(3) 「神経内科専門医」「症候の変動」「潜伏期間」という言葉について

水俣病の「原因」・「原因魚介類」や「病因物質」、そして症候などとの「因果関係」を明らかにする過程において、当初から医学に関連する多領域（臨床系や基礎系の医師や研究者）の専門家たちが協働してきた。なぜ神経内科専門医のみが水俣病の診断や認定作業を占有するのか誰もが首をかしげざるを得ないだろう。当の神経内科のみならず、精神神経科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、神経病理学、生化学、公衆衛生学、疫学などの多くの専門家たちが苦労を重ねそれぞれの役割を担ってきた。さらに法律学、社会学、政治学、メディアなども深くコミットしてきた。この事実を無視し、「神経内科専門医」が独占する根拠はどこにもないだろう。「神経内科専門医」の方々、多くの専門領域と共に深く協働しませんか。一緒に水俣の土地を歩いてみませんか。根本的なこと、いわゆる「専門家」ではないとされる、その土地に棲む住民の知恵（「ローカル・ノレッジ」）はきわめて重要で、メチル水銀暴露をうけた住民こそ本来「専門家」と呼ぶべきでしょう。

「水俣病」のメカニズムはまだ究明され尽くしていない。しかし原因は病因物質の排出とその原因魚介類の摂食であり、病因物質はメチル水銀で、その影響によって住民の身体にあらわれた多彩な症状群である。その症状群は「多様性」があり、その一部を切り取った枠組みに閉じこもって（自閉的に）判断することは、疫学的、臨床医学的にも誤謬（ごびゅう）だと言わざるを得ない。世界的動向は低濃度長期暴露の影響に関心が移っているにもかかわらず、日本においてメチル水銀暴露有症者はかなり以前の「判断基準」という「針で壁に止められている」。これは「症状の変動」や「慢性」、「潜在性」の問題にも大いに関連性がある。いかがでしょう。ふたたびそしてあらたに協働しませんか。

《第３回環境被害に関する国際フォーラム報告》

中国からの招聘者と共に参加して

アジア経済研究所新領域研究センター主任研究員　大 塚 健 司

2019年２月22日から24日にかけて熊本学園大学水俣学研究センターを中心とする実行委員会の主催、日本環境会議、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの協力、ならびに熊本市・水俣市の後援により第３回環境被害に関する国際フォーラムが行われた。この国際フォーラムは2006年に当時センター長であった原田正純教授が世界で公害被害問題の解決に尽力している当事者、支援者、研究者のネットワーキングを意図して企画・開催したのを契機とする。その後、2013年の第２回フォーラムから花田昌宣センター長のもとで開催され、今回につながっている。

今回海外招聘者としては、中国からはＮＧＯ淮河衛士代表・霍岱珊氏のほか、南京大学社会学院・張玉林教授、韓国からは加湿器殺菌剤被害者及び支援者グループ、カナダからは先住民水銀中毒被害者・支援者グループが参加・報告した。初日及び３日目の熊本学園大学及び水俣市公民館でのフォーラムはいずれも公開で行われ、各地からの招待者による環境被害の歴史的経緯や現状・課題、問題解決に向けたアピールとともに、多くの参加者との間で熱のこもった議論が展開された。また２日目の現地視察では、海外招聘者を中心に水俣病事件の現場にて熊本・新潟の水俣病被害者とともに事件の概況や現在抱えている課題について学ぶとともに、被害者・支援者との交流を行った。その際に前回のフォーラムや関連事業で知り合った海外招聘者と現地関係者らが再会を喜び合う場面を何度か見かけた。このことは水俣病被害者との国境を越えた交流がこのフォーラムを中心にして継続していることの何よりの証であろう。

筆者は、2005年11月に原田教授ら９名で中国淮河流域の水汚染被害の現場に霍氏の協力で訪問したのをきっかけに一連のフォーラムに参画してきた。今回筆者は、熊本学園大学でのフォーラム、水俣市での水俣病事件の現地視察と被害者・支援者らとの交流、水俣市公民館でのフォーラムと３日間にわたるプログラムに、霍氏の通訳も兼ねて参加の機会を得た。

霍氏は熊本・水俣の２回のフォーラムにて報告を行ったほか、水俣のフォーラムではパネルディスカッション「将来の課題と国際連携」にも参加した。報告では、淮河流域の美しい原風景とのどかな農村生活が80年代から水汚染の激化によって破壊され、癌をはじめとする様々な疾病が多発する「癌の村」が作られていく過程、それに対してフリーフォトジャーナリストとして、また環境ＮＧＯ代表として汚染企業と地方・中央政府に問題解決を働きかけてきた経験、その中で具体的な取り組みとして、河川水質・排水口の民間モニタリングネットワークの構築、癌や先天性心臓病などの患者への医療費の支援、汚染された地下水を直接浄化して村民に清浄な飲み水を供給するための飲用水生物浄化装置の建設と普及などについて報告を行った。淮河衛士の水汚染被害への取り組みは、環境汚染を加害者と被害者の点と点の関係ではなく、広く社会・生態システムを通した汚染と被害の拡大ととらえる点で、水俣病被害をめぐる問題でも指摘されている疫学的視点の重要性と通底するところがある。これは霍氏が環境被害と向き合う現場での問題解決に向けた実践とともに、原田教授による「淮河病」という指摘とも響き合うものである。また淮河衛士が建設している飲用水生物浄化装置は、きれいで安全な水の供給システムの対象からはずれているカナダ先住民地域にも有用ではないかとカナダのグループからも注目を集めていた。国際フォーラムが環境被害者同士の貴重な経験交流・共有の場となっていることを示している。他方で、加害―被害関係に対する責任追及については問題の複雑さに加えて、中国の権威主義体制のもとではアクションを起こすことが困難であることもうかがえた。

パネルディスカッション「将来の課題と国際連携」で質問を受ける霍氏と大塚氏（写真：水俣学研究センター）

もう１名の中国からの招聘者である張教授は、京都大学の農学博士の学位を持っており、日本語が堪能である。張教授の報告は、中国の環境政策の発展の傍ら環境被害問題が置き去りにされていることを自らフィールドワークを行う山西省の採炭地における地質災害を中心に、政策の問題点を論じたものであり、ジャーナリスト出身者らしい社会批判的な視点が光った報告であった。また張教授は今回国際フォーラムに初めて参加して、環境被害という視点から環境問題について議論をする場が中国で欠けており、その重要性に改めて気づいたようであった。熊本・水俣での国際フォーラムが目指す「被害者の視点にたち、公平と正義に基づく実践的な議論の場」が中国ではいつ、いかにして実現するだろうか。

《第３回環境被害に関する国際フォーラム報告》

水俣病と韓国の加湿器殺菌剤惨事

大韓民国政府社会的惨事特別調査委員会副委員長　チェ・イェヨン

2004年に「環境が病めば身体も病む」というテーマの下、ソウルで行われた環境保健国際シンポジウムに招待された原田正純教授が話した言葉を覚えている。「環境問題はお母さんの子宮から始まる」。胎児性水俣病問題を説明しながら言った言葉だが、とても耳慣れないながら衝撃的だった。

2006年に第１回環境被害に関する国際フォーラムに参加し、初めて水俣病患者と直接会い、水俣病を引き起こしたチッソ工場と被害者が発生した現場を見た。その時私は、韓国のオンサン病問題を紹介し、アジア地域での環境保健国際連帯ネットワークの必要性を提案した。インド・ボパール惨事の女性活動家と一緒に、即席で参加者たちと共にチッソ工場前でデモを組織したりもした。チッソ工場正門前に小さな橋があるが、その橋の欄干にもたれていた胎児性水俣病の男性患者２人の姿を写真に収めもした。

2016年に熊本学園大学水俣学研究センターの花田教授、中地教授ら一行が韓国に来た時、会ったことがある。その時は、加湿器殺菌剤問題の活動に専念している只中であった。そうでなくとも加湿器殺菌剤問題が起こった時、一体この世のどんな環境事件と比べられるか考え、被害者数や死亡と疾患の深刻さで日本の水俣病やドイツのサリドマイド事件と比較して、機会ができれば二つの国を訪ねて、彼らはどのように問題に向き合って解決していったのかを調べて見たかった。特に被害者らの活動が気になり、被害疾患の認定基準と争点は何だったのか、知りたかった。よって水俣学研究センターがどんな研究を行い、どのように運営されているのか関心を持ち、加湿器殺菌剤惨事もその類の中長期的な研究センターが必要だと考えた。

2018年に、第３回国際フォーラムで加湿器殺菌剤問題を扱うので被害者と一緒に来て主題発表を行ってほしいと要請を受けた。良い機会と思い、主催者側すなわち水俣学研究センターに加湿器殺菌剤の被害者遺族一人を追加招聘してもらいたいと頼むとともに、加湿器殺菌剤問題と水俣病問題を比較研究する韓日ワークショップを１日持つことを提案した。社会学、毒性学、医学、環境保健学、法学、ＮＧＯ、言論等の分野別専門家10名余りが韓国から参加する意思があると伝えた。予想外の提案だったのか熊本学園大学側から中地教授がソウルに来て細部プログラムを点検し、そうして『加湿器殺菌剤惨事と水俣病韓日ワークショップ』が組織された。

今回の水俣訪問を通した教訓というか得たものは、どれほど重要な問題だとしても、本人にとって必要であり切実であってこそ、その重要性が生々しく迫り自らのものになると分かったことである。環境運動家として水俣病問題を上っ面で知っていたが、加湿器殺菌剤惨事を経て訪問した２回目の現地踏査と被害者証言を通し、一種の同病相憐れむ感じを持つようになった気がする。

新潟水俣病の生き証人である88歳の医師、被害住民運動と地方自治活動が日本の公害問題と環境政策を引っ張ってきたと評価する老学者、20代で水俣現地に来て50年余りを被害者と苦楽を共にしてきた活動家、数十年間水俣病問題を取材し報道してきた元記者、白髪で一杯の彼らと出会い昔の話を聞いて、たとえ日本政府が水俣病問題を長いこと捻じ曲げ誤った対応をしてきたとしても、彼らにより水俣病被害者が慰められ日本社会が発展できたと考えた。

水俣現地踏査の過程で会った胎児性水俣病患者の坂本しのぶさんと母親フジエさんがふりしぼって言葉をつないでいく時に受けた衝撃は、忘れることができない。「ああ、水俣の被害とはこのようなものなのか…」、部屋いっぱいに詰めかけた数十人が一瞬静まり、被害者母子の表情を見て話し声に耳を傾ける瞬間が、今回国際フォーラムのハイライトであったと考える。「み、な、ま、た、びょう、は、な、お、り、ま、せん。」

水俣遠見の家で水俣病患者らと交流
（写真：水俣学研究センター）

被害者と運動家そして専門家が共に行う熊本学園大学水俣学研究センターの存在と活動方向に、韓国参加者たち全員が、大いに共感し学んだと異口同音に評価した。韓国社会が経験している加湿器殺菌剤惨事の解決過程に大きな示唆を与えた。韓国と日本を行き来し、「水俣病と加湿器殺菌剤惨事韓日ワークショップ」が開かれることを期待する。ひいては、アジアと世界のいたるところで起こっている環境保健問題を、被害者の視点で扱う「国際フォーラム」のようなプログラムが続くことを望む。

《報 告》

水俣病事件研究交流集会の魅力

福岡女学院大学
（水俣学研究センター客員研究員）　池 田 理知子

私は毎年、水俣病事件研究交流集会初日の夜の懇親会を楽しみにしている。都道府県別にグループ分けしてなされる自己紹介は、いかに多くの人たちが全国からここに集まってくるのかが実感できる。そして、お酒や料理をいただきながらのリラックスした雰囲気のなかで、「異文化交流」が始まるのだ。この交流は２次会、ときには３次会と続き、酒の席だからこそ生まれる意外な人の意外な話や歌声がそこでは聞ける。まだこの懇親会の雰囲気を経験していない方は、ぜひ一度参加してみてはどうだろうか。

さて、2019年の集会は、例年通り、幅広いジャンルを網羅し、かつ充実した内容のプログラムとなっていた。１日目は「水俣病の人文学」「水俣病の医学」「汚染サイトとしての水俣」、２日目は「水俣病訴訟の今」「水俣の過去と現在」「水俣の歴史と水俣病」と、それぞれのテーマのもとで、発表および活発な討論が行われた。水俣病事件の「今」を知るには欠かせないセッションばかりであった。

第14回水俣病事件研究交流集会池田氏報告中
（写真：水俣学研究センター）

今回、こうした数々の発表を通して感じたのは、当事者の存在の大きさであった。たとえば私のような研究者は、自分が行った研究の成果を所属学会等で発表し、同じ研究者仲間からフィードバックをもらうのが常なのだが、この集会はだいぶ雰囲気が異なる。それは、水俣病事件の真っただ中にいた人たちが少なからずそこに参加しており、あいまいな発言や分析・考察が許されない空気が漂っているからだ。そのことを特に強く思ったのが、集会２日目の「水俣の過去と現在」の発表のときであった。「現地研究センター資料からみえる守山工場（日窒アセテート）労組と水俣との関係についての一考察」では、会場に来ていた水俣工場の元第一労組（新日本窒素労働組合）組合員の人たちから当時の様子がうかがえる発言があり、この集会ならではの議論へとつながっていった。また、「『もやい直し』の現代的意義を再考する」では、評価が大きく分かれる「もやい直し」について当事者からの厳しい意見がでた。自らの立ち位置があいまいなままでの発表は、この場ではとうてい許されないのだと改めて感じさせられた。

当事者が見つめる緊張感のなかで行った今回の私の発表は、「『暮しの手帖』のなかの公害―1967年秋号の特集記事が描く水俣病」と題したものだった。四大公害病ということばがまだ生まれていなかった当時、口から摂取する食品や薬品を通して大規模な健康被害を発生させた７つの事件―黄変米、砒素ミルク、水俣病、サリドマイド、人工着色料、人工甘味料、農薬―を取り上げた記事についての考察である。公害と聞くと多くの人が頭に思い浮かべるのが四大公害病だが、それは一つの見方であり、他にもさまざまな公害の括り方ができるのだという「当たり前」に気づかせてくれる特集記事であった。52年前に書かれたこの記事の内容のみならず、『暮しの手帖』という雑誌への関心の高さからなのか、報告後の質問や意見の多さに圧倒されたが、見過ごしていた多くの点に気づかされる貴重な時間であった。

『水俣学通信』第28号の集会報告には、次のように書かれている。集会は、「専門家・素人の枠を取り外し、学問の壁を取り外し、広く討論する場としたいと考え開催しています」。だからこそ発表にあたっては、誰に向かって話すのか、どうやったら議論を深めていけるのかを考えなければならない。そのことの重要性をよりいっそう感じさせられた今年の例会であった。

第14回水俣病事件研究交流集会について、客員研究員の池田理知子先生に原稿を依頼し、寄稿頂きました。研究会は、１月12～13日、水俣市公民館ホールで開催し、日本全国、海外からの留学生、水俣病患者、支援者、研究者など延べ320人の参加がありました。次回は2020年１月11～12日に開催いたします。
（田尻）

《報 告》

タイ・ミャンマー科研（2016～18年） バンコク訪問の記録―金鉱山開発による公害・生活破壊と操業停止後の村の自立に向けた取り組み

水俣学現地研究センター長
（熊本学園大学社会福祉学部） 宮 北 隆 志

ＴＫＬ社（親企業はオーストラリア資本）による金鉱山の操業に起因する公害・生活破壊に、この10年間粘り強く向き合ってきた東北タイ・ルーイ県ナノンボン村訪問を終えて帰国したのが、2017年８月22日。タイ訪問直前に受けた人間ドックでの組織検査の結果をその日に知らされた。その後10か月の絶飲食、４回の開腹手術など、全く予期せぬ長い入院生活を経て、昨秋2018年９月から、ようやく大学での教育・研究業務になんとか復帰しつつある。

今回のバンコク訪問は、３月14? 19日で、この１年半の遅れを取り戻すべく計画したものだが、体力的に東北タイまで出かけることは無理と判断、ナノンボン村から「KRBK（故郷を守る会）」のリーダー・メーポップさん（49歳）、機織りグループのリーダー・メーロットさん（58歳）、メーマイさん（52歳）ら、村人９名をバンコクに招いてのフィールドトリップ（folkcharm訪問と相互交流）と夏に計画しているワークショップ（「ナノンボンの家庭料理大集合（仮称）」）の準備を行った。

16日は、社会的企業folkcharmを主宰するパツィ（Passawee Patsy Tapasanan）さんのスタジオを、村人、EARTH（Ecological Alert and Recovery・Thailand）のメンバーと共に訪問し、オーガニック・コットンの製品化にかけるそれぞれの想いの共有を図った。その後、自宅を作業場としてバッグ、ポーチ、小銭入れなど様々な小物のデザインと製作に取り組むCrafts-womanのノイさん（54歳）、Tailorのコーンさん（60歳）を訪ね、綿の栽培・糸紡ぎ・染色・機織りに取り組む農家と、デザイン考案から商品化・販売で消費者と繋がる裁縫師の初めての出会いと交流の場が実現できた（folkcharmについての詳細はhttps://folkcharm.com/）。

ノイさんは、前々から手芸に関心があり、自分で楽しんだり習いに行ったりしていた。folkcharmと関わるようになり、パツィさんの考え方に共感してどんな小さな端切れも無駄にしないように柄に組み込んだりして、布全てを使う工夫を凝らしているという。屋外のベランダに置いたテーブルの上に、色々な作品を並べて待っていてくれた。几帳面な人らしく、工程を追って番号をふった製作段階の素材も用意してあった。細かい作業が主となるので、手作業で、丁寧に時間をかけて製品を仕上げるのだそうだ。確かに、見た目も緻密で丈夫そうな小物やバッグ類が整然と並べてあり、一同、熱心に見入り手に取って観察していた。

次は、衣服部門の裁断と縫製を請け負っているコーンさんの事務所を兼ねた作業場。電動のロックミシン（JUKI）を含む２台のミシンが並んでいた。どちらも日本製で、縫製工場で使われていたものを下取りしたものとのこと。最近は、孫の世話に追われて仕事のペースが落ちたと言いながら、裁断し、芯地をアイロンで貼り付け済みのパンツを手際よく縫って見せてくれた。一同、その手際を興味津々に見ていた。

クラフト担当ノイさん宅にて（３月16日）

17日は、前日の振り返りと同時に、今後、オーガニック・コットンを核とした生業の持続性を高めるために、若い世代の育成、裁断や縫製技術の向上、デザイン力を身につけ市場に受け入れられる商品の製作などについて、folkcharmやEARTHのネットワークを活かして取り組んで行くことが、まず確認された。

さらに、メーポップさんから、武装集団150名による住民襲撃・暴行事件（2014年５月）以降緊迫した状況が続いている金鉱山問題の近況報告を受けた。住民がTKL社に対して、損害賠償と金鉱山周辺地域の環境修復を求めた訴訟で勝訴し、昨年12月13日には、裁判所が149名の原告一人あたり104,000バーツ（日本円で約36万円）の損害賠償と環境修復をTKL社に命じたこと、また、TKL社が、金鉱山入り口の道路を一部ブロッケード（封鎖）し有害化学物質の搬入を監視した住民を訴えた裁判でも、住民が勝訴したこと（昨年12月24日）などの事実を共有し、金鉱山周辺の６つの村の取り組みに対して、社会正義に基づく理解と共感が一定広がりつつあることを確認した。

その後、生活の基本である「衣・食・住」に地域の資源（「宝」）をどう活かしていくのかという視点から、「ナノンボンの家庭料理大集合（仮称）」の実施に向けた意見交換を村人たちと行い、村人から早速たくさんの提案を受けることが出来た。

今回の訪問は８年ぶりの下院総選挙の投票日直前であったが、昨年３月に設立された「パーク（党）・サーマン（ふつう）・チョン（人びと）」（Commoners Party）から、小選挙区に16名が立候補しており、ナノンボン村からも、ボイさん（38歳）とメーマイさん（42歳）の２名の女性が、「環境正義」と「草の根民主主義」を正面に掲げて初の議席獲得に挑んだ勇気を高く評価したい。

《報 告》

ミャンマーの金鉱山と水銀使用の風景

水俣学研究センター長
（熊本学園大学社会福祉学部）　花 田 昌 宣

水俣学研究センターでは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と連携して、去る３月23日から31日までミャンマーの小規模金鉱山における水銀使用とその影響についての現地調査を行なった。研究センターからは、井上ゆかり、田尻雅美、中地重晴、花田昌宣研究員と客員研究員の高峰武が参加し、京都大学からは藤倉達郎、中村沙絵の２人が参加した。

23日夜にミャンマーのヤンゴンに到着。翌24日は朝ホテルを出てバンをチャーターして2006年から首都になったネピドーに向かう。約400kmの道のり。

25日、天然資源環境保全省の環境保全局からヒアリング。Hla Maung Thein局長とSein Htoon Linn副局長が丁寧に対応してくれた。ミャンマーは国際水銀条約には加わっておらず、２年後をめどに検討中とのことであった。この国の金の生産量は公式統計で1,700kgと少ないが、金鉱山の規模や数から言えば少なすぎる。おそらく国家産業上の重要な資源であり、正確に公表されていないと考えられる。いっぽう、水銀の輸入量は不明とのことだが日本から10トン以上輸出していた。

ネピドーを25日午後にでて、車で１日移動してマンダレー管区の環境保全局および鉱山局の支所に挨拶。金鉱山はどうも微妙なところらしく、こうした手続きはおろそかにはできない。その後、夜に金鉱山に近いシングという町のさらに外れにあるホテルに投宿。

26日にようやく金鉱山に向かう。最初に訪れたのは、大規模な金採掘現場で立穴式に掘削しており、すでに地下７層（深さ200m程度）まで掘り進んでいる。この鉱山では、金鉱石を採掘し、粉砕するところまで行っていて、金の精錬・回収は行なっていない。

大規模金鉱山（写真：水俣学研究センター）

午後からは、近くの小規模の事業所を訪問。ここでは粉砕した鉱石を、女性たちが直径80cmほどの丸いお盆のような器を使って選鉱。金鉱石だけが残る方法。そこからさらに水銀をつかって金を回収する。４メートル四方の粗末な小屋の真ん中に炉があり、そこに中年のベテラン風の男性がやってきて、水銀アマルガムを小さな金属の皿に入れて炭火の中に置く。送風システムで風を送ると炭火は1,000度ぐらいにはなるはずで、水銀の沸点は357度なので十分蒸発する。焼いている最中はこのベテラン労働者は後ろを向いて窓の外を見ており、時々振り返って様子を見る。被せてある穴のついた蓋を水にジュッとつける。水銀を一部でも回収しているのかもしれないが、焼いている際には水銀蒸気は穴から出て行く。５分ぐらい経つと水銀は蒸発してしまっており、金だけが底に残っているというものだ。水銀が危険なのはわかっているが、直接吸い込まないようにかなり気をつけている様子である。こうやって焼いて取れた金の純度は60％ぐらいということだった。このベテランの方は48歳で、この事業所に入って20年。月収が20万チャット（１万５千円）ほど。他の労働者達は日給で５千か６千チャット。

事業所にて女性がたらいを使用して選鉱
（写真：水俣学研究センター）

翌日、大規模な露天堀の金採掘場も見せてもらった。大きな重機で掘り下げている。砂状の土質で、土砂に水を混ぜてベルトコンベアのようなもので汲み上げる。どうも比重法で選鉱している。砂金状になっているので水は流れ金は沈むのである。

現地３日目の28日はさらに鉱山を回り、ついで街に出て金を買い取ってくれる金商人の店を見に行った。鉱山の村からバイクに乗った女性がビニール袋に入れた金と水銀のアマルガムを売りにきた。その店の軒先で焼いて純金にしてもらい、計量して代金を受け取って女性は帰って行った。

金を焼くのに水銀を使うのも特段不思議なことをしているというわけではなかった。この店の周りには同様の店が何軒もあってどの店の軒先にもアマルガムを焼く炉が置かれていた。水銀はマンダレーで1.6kgを20万チャット（約14,400円）で買ってくるという仲買人がいてこの村で売っているとのことだ。

あまりにも普通の風景の中で水銀を使って金回収をしており、水銀も普通に手に入る。環境保全局の副局長が「タバコを買えるように水銀が買えるよ」といっていたがまさにその通り。

今回の視察は現地行政官の協力で実現した。水銀に関しては代替する方法があればやめるよというのが事業主の反応。ミャンマー政府は削減のための技術指導と支援が必要というスタンス。今回はあくまでもパイロットスタディとの位置付けであり今後さらに地域の社会や経済に内在した調査が必要だと痛感した。

2019年度 科学研究費補助金採択結果

水俣学研究センターで本年度採択された科学研究費補助金は以下の２件と継続が１件です。

〈新規〉

・**研究成果公開促進費**（データベース科研）
研究代表者：花田昌宣
データベース名称：水俣学研究文献データベース
（Database of Minamata Studies' Documents）

・**研究種目：基盤研究**（C）
研究代表者：高峰　武
研究課題名：第三水俣病事件は幻か？ 真相解明と資料の収集・整理で歴史的教訓を得る
補助事業期間：2019～2022年度

〈継続〉

・**研究種目：基盤研究**（C）
研究代表者：田尻雅美
研究課題名：生の視点からとらえた水俣病当事者の社会福祉的ニーズの表出と実現に関する研究
補助事業期間：2015～2019年度

水俣学研究センター日録

1月

5日	第38回チッソ労働運動史研究会：花田・井上・磯谷・富田・石井・鈴木・福原（大学）
8日	ブックレット⑯編集委員会：花田・中地・井上・田尻（大学） 水俣病公式確認60年アンケート検討会：花田・中地・守弘・藤本・井上・田尻・田中・斎藤（大学）
10日	水俣学講義14回目：家中茂氏（大学）
11日	環境省・化管法施行状況検討会：中地（東京）
12～13日	第14回水俣病事件研究交流集会：花田・宮北・中地・萩原・矢野・井上・田尻・藤本・池田・石井・伊東・斎藤・高峰・田中・谷・永野・濱口・原田・東島・藤野・番園・山口・山下・除本・頼藤・飯島・尾崎（水俣）
13日	第７回水俣病臨床研究会：花田・井上・田尻・伊東・高峰・谷・藤野・山下・頼藤・番園（水俣）
15～16日	国際フォーラム韓国鈴木氏、社会的惨事特別調査委員会等と打合せ：中地（ソウル）
21日	水俣病事件資料集編纂委員会：花田・矢野・井上・高峰・山本・東島（大学） 研究不正防止講演会：花田・宮北・中地・藤本・井上・田尻・高峰（大学）
24日	水俣学講義15回目：花田（大学）
27日	若かった患者の会：田尻（鹿児島）
28日	環境化学会ダイオキシンセミナー：中地（大阪）
31日	水俣病公式確認60年アンケート調査検討会：花田・中地・藤本・井上・田尻・斎藤・田中（大学）

水俣学研究センター新刊紹介

水俣学ブックレット⑯

「ガイドブック　水俣病を学ぶ、水俣の歩き方」
熊本学園大学水俣学研究センター 編著

水俣病事件のあらましや補償制度など、水俣病の概要を掲載。また、水俣市周辺の地図や写真を使って水俣病を学ぶための訪問先などを紹介しています。

水俣や周辺地域で一体何があったのか、何を教訓とすべきなのか、今なお残されている問題は何なのか。このガイドが、新たな気づきと、たくさんの人と人との出会いを生み出すものとなることを願っています。

発行：熊本日日新聞社　定価：800円＋税
（熊日出版　☎096-361-3274）

2月

4日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田・井上・田尻・伊東・谷・山下・平郡・番園（熊本）
7～8日	差別禁止法研究会「第４回当事者の集い」：井上・田尻（新潟）
22～24日	第３回環境被害に関する国際フォーラム：（大学・水俣）
23日	医学研究者ミーティング：花田・井上・高岡・藤野・斎藤ほか（水俣）
25日	“ノーモア・ミナマタ＆ノーモア加湿器殺菌剤惨事”水俣病事件と加湿器殺菌剤惨事日韓ワークショップ：中地・花田・井上・田尻（水俣）

3月

7～9日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田・井上・平郡・谷・山下・番園・池田・斉藤（福岡・水俣）
8日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：田尻（福岡）
14～19日	タイ調査：宮北・中地（タイ・バンコク）
17～18日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田・井上・田尻・平郡・谷・山下・番園・池田・斉藤（福岡）
19日	ミャンマー調査研究会：花田・中地・田尻・井上（大学）
23～31日	ミャンマー調査：花田・中地・井上・田尻・高峰（ミャンマー）
毎週金曜	水俣病研究資料返却と収集：井上（熊本大学）
隔週火曜	健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
その他	熊本地震関連講演や研修・視察の受入れ、環境問題に関する研究会などへの協力、災害科研による研究会・調査も行いました。

編集後記

第３回環境被害に関する国際フォーラム、ミャンマー調査など、多くの方にご協力頂いた。人とのつながりに感謝している。（M・T）

水俣学通信
第56号　2019.5.1

編　集／熊本学園大学水俣学研究センター　　発行人／花田　昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1　熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913（ダイヤルイン）　Fax：096-364-5320
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/　E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印　刷／ホープ印刷株式会社